
研究発表

My Ántonia にみる開拓地の吸血鬼 ——ジムによるウィック・カッターへの執着について

三浦 直樹（英文学専攻修士課程2年）

ウィラ・キャザーの *My Ántonia* (1918) は語り手のジムがボヘミアからきた移民の少女、アントニア・シメルダについて、子供時代から現在に至るまでの記憶を回想するといった筋書きである。物語は牧歌的で叙情性を帯びる反面、暗く痛ましい挿話が多様にえがかれている。なかでも、ウィック・カッターによる暴行事件と、カッター夫妻の結末についてはジムの強い執着がよみとられる。回想形式をとる本作においては、こうした記憶のほころびは重要な論点となる。

本発表はこの執着について読み解くことを目的に、ウィック・カッターという悪党を分析する。カッターは吸血鬼性を随所に備えている。しかし、彼をゴシック・ヴィランとして読む試みはなされているが、その吸血鬼的な表象についてはほとんど指摘されてこなかった。

カッターは高利貸しとして、ヨーロッパからネブラスカへ渡ってきた移民たちを搾取する。19世紀末のヨーロッパ文学において東から侵入する恐怖としてえがかれてきた吸血鬼が、この作品では内部に構え、東から来る移民を搾取しているのだ。ここには開拓の現実のなかで他者として直面する、移民たちの受容をめぐる問題があった。

こうしたカッターに執着をみせるのは、ジムの成長過程に多大な影響をあたえたアントニアにとっての脅威を理解し克服するためであった。ジムはカッターの最期を法律家の視点で語り、合理的で法の秩序にもとづいた克服をとげる。そうしてジムはアントニアを生命の始祖として、ひいては新たなアメリカの始祖として位置付けられるようになる。

講演

生きるために本屋をやっている

関口 竜平（本屋 lighthouse）

本屋 lighthouse という新刊書店の特徴をいくつか挙げるとするならば、政治的な主張をはっきりとすること、反差別のポリシーを掲げていること、といったことになるらしい。「らしい」と書いているのは、よくこれらの観点から紹介されたり取材を受けたりするからで、個人的には「それが特徴になってしまうのはどうなんだろうな……」と思っていたりする。私にとっては普通のことだからだ。

とはいえその普通が世間的にはそうではないということもわかるし、せっかくこのような機会を頂けたので、どうして私にとってはそれが普通なのかということを、本屋 lighthouse の成立過程を通して改めて考えてみたい。幼少期にはサッカーボールを追いかけ、本とはほぼ無縁の生活を送っていた人間が自分で本屋を始めるようになってしまったこと、その過程になんらかのヒントがあるのではないか。

もちろんそこには、法政大学での英文学研究も含まれる。おそらく私の、あるいは本屋 lighthouse の土台にはサッカーと文学研究があり、両者がどのように混ざり合っているのかを明白にすることはできないかもしれないが、大切なものであることは間違いない。

社会情勢の悪化は私たちの「生」を脅かす。その実感は本屋を運営しているからこそ強く伝わってくるものなのかもしれない。端的に言えば、社会という基盤が貧弱になればなるほど、本が読まれなくなる。特に文学作品が。だからこそ、本が必要になる。文学が必要になる。社会を豊かにするために、世界平和のために、そしてなによりも「私＝あなた」が生きるために。

そういう話ができればいいな、と思います。がんばります。

関口竜平（せきぐちりょうへい）

1993年2月26日生まれ。法政大学文学部英文学科、同大学院人文科学研究科英文学専攻（修士課程）修了ののち、本屋 lighthouse を立ち上げる。著書『ユートピアとしての本屋 暗闇のなかの確かな場所』（大月書店）など。将来の夢は首位打者（草野球）。特技は二度寝。

本屋 lighthouse (<https://books-lighthouse.com>)

講演

環境人文学の現在地：人新世からエコロジカル・イマージョンまで

波戸岡 景太（英文学科教授）

今世紀初頭に提唱された「人新世」なる概念は、文学、哲学、文化人類学といった隣接分野を「脱人間中心主義」の立場から包括する「環境人文学」の形成を促進した。この環境人文学において必須とされるのが、マルチスピーシーズ (multi-species)、ポストヒューマン (post-human)、モア・ザン・ヒューマン (more-than-human) といった諸概念であり、発表者もまた、これらのキーコンセプトを用いつつ、現代アメリカならびに現代日本の文学や映像コンテンツの分析を行ってきた。しかしながら、「マルチ」「ポスト」「モア・ザン」といった表現のもつ曖昧性は、これらの言説に物語を介して対峙する読者／鑑賞者を置き去りにしてきた感が否めない。発表者はかねてより、アダプテーション研究の観点から、読者／鑑賞者の没入 (immersion) というものを分析してきたが、現在は、「読者／鑑賞者をいかにして『マルチ』や『ポスト』や『モア・ザン』なる認識に基づく世界観に没入させることが可能か」という環境人文学の次なる課題を、エコロジカル・イマージョン (ecological immersion) という概念のもとに模索中である。本講演では、このような発表者の取り組みを紹介しつつ、環境人文学の現在地を明らかにしていきたい。